



## 岳友(とも)を偲んで

11月23日、十勝岳連峰、上ホロカメットク山の安政火口付近で突然の大規模雪崩が発生し、私の所属する日本山岳会の11人が雪崩に巻き込まれ、4人が尊い命を失い、ひとりが大怪我をしました。

毎年この時期、雪上訓練で行っていた親しい山でした。私は前週に富士山山麓の西湖での全国自然保護集会に行ってきたばかりで、久しぶりに自宅でのんびりしていた時、突然携帯が鳴り、長谷川支部長から「雪崩だ！何人が埋まっている。すぐに冬山テント泊装備で準備して」との連絡が入りました。札幌にいる人たちで出発。その時にはこんな大きな惨事になるとは思いもよりませんでした。(右撮影 海老名名保さん)



4人のご冥福を祈り献花する会員

24日、テントに收容されていた鈴木和夫さん、鶴岡節子さん、吉澤宣哉さんの死亡が上富良野町立病院で確認されました。助田梨枝子さんは、膝に大怪我。夫の助田陽一さんも警察や消防署など、地元山岳会、私たちの会のメンバーで捜索し、9時過ぎに掘り出されましたが窒息死と確認されました。無念で悲しい気持ちでいっぱいです。

鈴木和夫さん(63歳)は屈強の体力で、いつも重い共同装備を背負って、常に私たちの歩きをしっかりと見てくれていました。気は優しく力持ちの和夫さんは山の環境を守る活動でも、さりげなくそれでいて最大限の協力を惜しまない人でした。また北海道支部の頼りになる事務局長でもありました。助田陽一さん(68歳)は

山行歴50年のベテランでした。妻の梨枝子さんといつも一緒。いつも周りの雰囲気明るくする笑顔の人でした。少し前に宮崎支部との交流登山を楽しんで、その思い出の写真を前日に仲間の皆さんに送ったばかりだったそうです。高山植物のパトロールの件では、何度か芽室から電話をいただきました。「みなちゃん、富良野岳にメアカンキンバイたくさん咲いてたよね」。私よりもたくさんの花を知っていらっしやるのに、自然保護委員長をしている私を立てて下さった温かい声が耳に残っています。

鶴岡節子さん(56歳)とは、何度も分水嶺踏査で一緒に歩きました。ジムに通って体力作りをしていた熱心さと、困難な山に挑戦する意欲あふれる女性でした。

吉澤宣哉さん(60歳)は日本山岳会に入ったばかりご一緒の山行は少なかったですが、優しい笑顔が印象的でした。



11月28日助田陽一さんの葬儀会場にはピッケルや年季の入った登山靴や仲間と登った思い出の山の写真が並べられました。

定年退職して、これからの人生に夢をふくらませていたと伺っています。

私ももしかしたら上ホロカメツク山に行っていたかも知れないと思うと、身代わりになってくれたような申し訳なさいでいっぱいになりました。事故の原因究明はこれから進められますが雪崩の怖さを身をもって知らせてくれたように思います。遭難の報を受けて仲間の車で現地に向かう準備をしていたら、「母さん、遭難しないでよ」と息子のひとこと。私が留守の自宅には10人近くの友人たちから「みなさんは大丈夫？」との電話があったそうです。どなたか確認する間もなく、葬儀や、惜別の会の準備などで時間が過ぎてしまいました。この場を借りてお礼申し上げます。現場に向かう途中で数人の方から安否を気遣う電話をいただきました。温かいお気持ちを嬉しく思いました。

12月8日には日本山岳会北海道支部で「わが岳友（とも）との惜別の会」を開き、東京からは宮下会長や副会長など6人を含めて、全道各地から120人が参加して故人を偲びました。心のこもった惜別の言葉の中から、銀河通信の読者でもある清水和男さんの詩をご本人の了解を得て紹介します。

仲間よ 山の仲間よ

今はもう思い出の中だけに  
生きている 山の仲間達よ  
山の彼方の幸せを求めて  
いつも友らへの微笑みを絶やさず  
ともに登ってくれた四人の仲間達よ

雪に覆われた火の山の  
誰にも見つけることの出来ない  
時間と空間の隙間から 一瞬  
あなた達は ハリー・ポッターのように  
山神たちが棲む彼の世界へ旅立った

少し早過ぎたのではないか  
もうあなた達の笑顔と会うことの出来ない  
遺された友らは口惜しい  
もうあの明るい声すら聴けない  
あなた達を偲ぶ仲間達は悲しい

せめて彼の国の神々の遊ぶ庭山に登り  
もっともっと幸せになるよう  
あなた達が愛したこの世で  
みんなが祈っているから  
四人の仲間達よ さようなら

いつもなら山スキーに心が飛んでいたのに、行ってはいけないとセーブする私があります。自分を励ます言葉を探しているこの頃。星野道夫や、金子みすゞや、宮澤賢治の本を引っ張り出して読んでみました。

先日は小野有五さんから新刊「自然のメッセージを聴く」が送られてきました。まさに静かな大地からの伝言。魂の言葉に心が震えました。その一節。

誰もが人に告げられない悲しみを、心のひだにたたみこんで生きている。

自然の目で見れば、ひとりひとりの悲しみが無限の重みをもっている。誰もがディス・エイブルであり、そして同時に他の人には決して代われない能力をもっている。

人間の目でだけでなく、自然のまなざしで見つめたい。



11月26日、鈴木和夫さんを偲ぶ会で山メーリングリスト会員のたくさんの方からの偲ぶメッセージを読み上げたみな子（撮影西田弘さん）



献花する会員たちの長い列



「孫が夢で天国に逝ったおじいちゃんに会ったよ」と話す助田陽一さんの長男、岳史さん（左）

助田陽一さん、鈴木和夫さん、鶴岡節子さん、吉澤宣哉さんのご冥福を心からお祈りします。と共に助田梨枝子さんの一日も早いご回復をお祈りします。

# 富士山麓「西湖」に行ってきました

## 自然保護全国集会

11月17日～18日富士山麓「西湖」で開かれた日本山岳会自然保護全国集会に福島町の清水和男さん、日高町の高橋健さんとで参加しました。

本部からは宮下会長や神崎副会長、登山家の渡辺玉枝さんら全国から150人が参加し、支部報告や「日本山岳会員として考える山の環境とマナー」について討議しました。

いつも支部報告は北海道から。山歩集団青い山脈の代表でもある清水さんは、大干軒岳の高山植物盗掘が野放しの現状に危機感を抱き従来の山岳会の主旨に自然保護の理念を融合させて発足させたいきさつや、パトロールで会員の意識も変わったことなどを報告。山からは何も除かず、何も加えずをモットーに活動していること。日本山岳会が山岳自然の環境保全を強く謳っていること



11月18日 端正な富士山をバックに竜ヶ岳頂上で  
撮影 熊岡達雄さん(静岡支部)

に大いに共感したと述べました。北海道のパトロールに似た活動では山梨県の山岳レンジャーの自然保護活動についての報告がありましたが、26の山岳団体が構成され300人を越えるメンバーで、パトロールや清掃を行っているとの事。山形支部のイヌワシの森づくりや信濃支部のシカの食害など全国のさまざまな山岳での現状がリアルに報告されました。

テーマ討議では、私も高山植物部会として北海道の高山植物は盗掘は減少したが、登山道が破壊して植生にも影響を与えている利尻山などについて報告しました。今後の課題として、シカの食害を各地で調査していくことになりました。

富士山と私」と題する座談会もありました。懇親会は150人近い会員で 会場は身動き出来ないほどの熱気でした。

18日は登山は十二ヶ岳、竜ヶ岳、三つ峠に分かれての登山とバスツアー。

私は竜ヶ岳に登りました。8時15分登山口出発。本栖湖畔から気持ちのいい尾根歩き。葉を落とした木々の間から青く光る本栖湖が美しい。登山道は整備 されていますが過剰ではなく広すぎず、狭すぎず歩きやすかったです。石仏を過ぎた頃から笹原の斜面のジグザグ道を進むたびに、富士山が右に左にと見えてきて10時45分、広い山頂に。

ウワーと思わず、誰からともなく歓声が上がりました。雪帽子をかぶった富士 山が裾野までなだらかに広がり、ハヶ岳や南アルプスが展望できました。

素晴らしい眺望を前に風もない穏やかな広場で早い昼食をとり、記念写真を撮り、11時半出発。分岐からは急斜面の原生の樹林帯を歩きます。黄色く色づいた広葉樹と落ち葉のじゅうたんのおかげで足には負担がかかりません。つづら折りの斜面をどんどん進むと、麓はもう目の前です。コアジサイ

いや、アワブキの葉を地元の渡辺玉枝さんが教えてくださりました。ムラサキシキブのピンクの花が印象的でした。13時10分下山。2日間の自然保護集会を終えました。



黄葉が青空に映えて



深いブルーの本栖湖



親しくなった福田光子さん(秋田支部)と里見清子さん(山梨支部)と(左から)



12月2日 送信状態のビーコンを探し出す訓練  
(藻岩山で)

## 雪崩講習会で勉強中！

10月28日に雪崩安全セミナーに参加しました。

積丹岳でスノーモービルによる雪崩事故があり13人のうち4人が死亡した事故の検証を、現場を直ちに調査した小笠原実孝さん、雪崩研究の第一人者の秋田谷英次さん、雪崩研究会の松浦孝之さんが報告しました。モービルの重量、走行による振動などが雪崩を引き起こしたようです。

午後からの日本ネットワーク理事長である出川あずささんがパワーポイントを使って、本州各地での雪崩を紹介したのは衝撃を受けました。

山スキーで雪崩を起こした映像でした。私はスキーは下手だし、すごい所に行くことはありませんが、それでも冬山には3種の神器が必要なことが理解できました。3種の神器とはビーコン、ゾンデ棒、スコップです。高い買い物でしたがその場でそれらの道具を買うことにしました。

後に雪崩が現実になるとは、夢にも思っていませんでした。12月2日、雪崩を回避することが一番大事だけれど、登山をする者としてきちんとした知識は必要だと思い、藻岩山での雪崩講習会に出かけました。

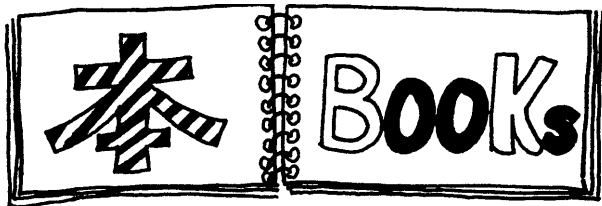
まずはビーコンの装着。送信状態になっている雪の中に埋められたビーコンを、受信アンテナが最も強力な電波を発する所を探し出す訓練を何度も繰り返しました。5分以内で素早く行わなければなりません。ゾンデ棒もすぐに組み立てられなければならないし、何度も経験が必要だと分かりました。

これからも機会あるごとに雪崩に関する基礎知識を学び、五感を研ぎ澄まし、自然からのメッセージを感じ取りたいです。

雪崩の怖さを身を持って伝えてくれた4人の死を厳粛に受け止め、安全登山をしたいと決意しています。



こんな上から発信していることも



### 「明日も必ず夜が明ける」

アルツハイマーの夫と歩んだ日々

館崎 やよい著 一耕社 1524円+税



原発に反対する運動や、平和や地域通貨「ガル」を広める市民運動を続けて来た館崎やよいさんは「イブツ」の編集もしておられてお名前は良く知っていました。

夫がアルツハイマーと診断されてからの8年間の介護記録です。インターネットのブログで日々の思いを綴っていたものを一冊にまとめました。

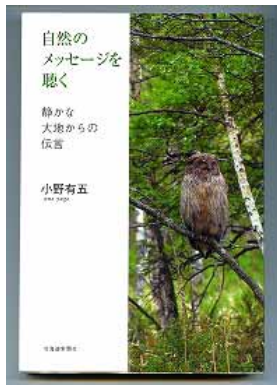
やよいさんは二番目の子どもを出産直後に病気で亡くし、自然食療法を上京して学んだことが、チェルノブイリ事故を契機にした原発反対運動に関わるきっかけでした。「誰にでも出来ることではない」とどこに行くにも運転手を務めてくれた夫、和夫さんの温かさが伝わってきて、だから介護の日々を大事に過ごせたのだなとしみじみと思いました。

普通の夫婦の老後では経験できないほどのたくさんの思い出。田んぼでどろんこになりながら田植えをしたこと。原野で流星を見たこと。湿原で蛍を追いかけたこと。豊かな時間を過ごせた夫婦の絆の深さに感動しました。

つらくて、疲れてどうにもならない時、それを覆い隠すように市民運動を続けてきたやよいさんが、友人が届けてくれた三浦光世さんの懐メロテープを聴きながら号泣したエピソード。私も15年前、夫が思いがけない大病をした時、心細くてひとり泣いた日を思い出しました。

2006年3月、72歳の生涯を閉じた夫和夫さん。介護5であっても五感は最期まで残っているというのも自宅で介護してきたから言える言葉です。

夫婦は互いに支え合って生きていくのだなと心がふわりと温かくなりました。同じ病気で苦しむ家族を抱えている方にも是非読んでいただきたいです。



## 「自然のメッセージを聴く」静かな大地からの伝言

小野有五著 北海道新聞社 1600円＋税

私が小野有五さんと出会ってからどの位になるのだろう。「北海道の森と川を語る会」であったり、知里幸恵記念館を作る運動、高山植物盗掘防止ネットワーク、北大のハルニレを残そうと運動したり、千歳川放水路やサナル川にダムを作らせない運動などさまざまな市民運動の先頭に小野先生の姿があります。見て、歩いて、考え、行動する科学者を私は小野先生以外に知りません。いつも市民の目線で、平易な言葉で伝えてくれるので多くの人たちがその隊列に加わったのではないのでしょうか？私もそんなひ

とりです。

この本は北海道民医連新聞や北海道新聞に連載したエッセー「自然へのまなざし」に新たに書き下ろしを加えて一冊になりました。

私が民医連新聞の編集者の三田さんに紹介した縁で、素敵な本になり、人と人をつなぐ出会いのかけがえのなさを実感しました。

もちろん毎月、楽しみに読んでいたエッセーですが、まとまった文章を改めて読み、五感をとぎすまして聴く生きものたちの声、大地からの語りかけが胸にしみわたっていくのを覚えました。

雪崩遭難事故で4人の友人を失い、銀河通信を書く気力も無くしかけていました。自分を励ます言葉を探して、星野道夫や、宮澤賢治、金子みすゞの本を引っ張り出してパラパラとページをめくっていた時に、この本が小野先生から届いたのです。こんな風に人は支え合うんだなぁと嬉しかったです。

詩のような魂の言葉の数々。「年は変わり、季節はめぐっても、私たちの人生は、繰り返すことなく、どこかで終わる。(中略)ただ貫く棒のように、始めがあって終わりがあるのが私たちの短い人生である。

そうであるなら、なおさら、せめてこれだけでもという意志を貫き通したい。生きている限り、守るべきものを守り、少しでも、ほんとうに良いと信じられる方向へ、世界を変えていくための力になりたい。」小野有五さんの静かな決意が伝わってきます。

「私たちはみんな、自然のなかを循環するもの、自然のかすかな息吹にすぎない。

せめてそのつかのまの時間、めいめいが、めいめいにしかできないことをやっていきたい。

誰でも、けっして他の人に代われない何かをもっている。

自然に無駄なものがないように、ひとりとして無駄な人間はいない。

耳をすませば、きっと聞こえてくるはずだ。

「ひとりひとりがかけがえのない自然」

という自然からの伝言が。

山に夢中になったこの数年。自然の中に浸かっているのが好きでした。でもだんだんより厳しい山を目指すようになっていました。この本に出会ってまた身近な自然をもっと大事にしていきたい。そんな体力なら十分にあるのではないかと。

私も世界をほんの少し変える力になりたいと思いました。

「自然のメッセージを聴く」にもありましたが、以前から「ちひろ美術館」に行きたい、行きたいと思って来ました。

自然保護集会の帰りに新宿から西武新宿線で上井草駅で降り田園風景の中を歩いて10分。静かな住宅街に溶け込むように美術館がありました。残念ながら休館。安曇野ちひろ美術館と共にもう一度訪ねたいと思っています。



11月19日 上井草の  
ちひろ美術館で



## 「せめて一時間だけでも」 ホロコーストからの生還

ベーター・シュナイダー著 八木輝明訳  
慶応義塾大学出版会 1800円＋税

ナチス政権下のベルリンの地下潜伏から、奇跡的に生還したユダヤ人音楽家、コンラート・ラテ。コンラートの資料と回想に基づく記録をドイツ人作家、シュナイダーが本にしました。

ブレスラウ（現ポーランド）に生まれたコンラートは、1943年、21歳でベルリンに逃れ、ナチスの秘密警察や、密告者の目を欺きながら、地下

に潜伏。両親はアウシュビッツで殺害されますが、コンラートは辛くも難を逃れます。

多くの人がナチス政権に服従したもとでも、ユダヤ人を助けたドイツ人が少なからず存在したことが本書で明らかにされています。

世界的なピアニストのエドウィン・フィッシャーは、コンラートの境遇を察して、資金や食料配給券を提供し、ピアノを教えました。反ナチス運動にも関与した指揮者、レオ・ポルヒャルトは指揮法を伝授しました。その他にも劇場関係者や牧師、庭師、看護師など50人もの人がコンラートを援助したと言います。

極限の状況の中で、勇気と誇りを持って助けたドイツ人もたくさん存在したことに驚きと感動を覚えました。私もそんな毅然とした生き方がしたい。一人ひとりの良心のもとに行動する勇気の重みを考えさせられました。

戦争への道を歩もうとしている日本。一人ひとりの勇気が世の中を変えていくのだと励まされました。

題名は刻々と流れていく現在の時間を真剣に生きていく姿勢と、あきらめずに行動を起こすことによって運命を切り開いていこうとする積極的な生き方が込められています。

映画「戦場のピアニスト」を彷彿させました。

## 「魔法のことば」 星野道夫著

スイッチ・パブリッシング 2400円＋税



本書は日本の各地で講演した10話を収録しています。

ずいぶん前に読んだものですが、突然の雪崩であの世に旅立ってしまった友人たちを思いながら再読しました。

偶然にも小野有五さんの新刊にも星野さんのことばが収録されていて巡り合わせの不思議さを感じました。

カリブーの大移動の写真は、「こんな世界もあるの?」と思わせる荘

厳でありながら詩的で、星野さん自身が、その大自然に溶け込んでいるのが目に浮かぶようです。『アラスカを旅していて「あと100年くらい早く生まれていたらよかったな」という思いがいつもあるなかで、初めてカリブーの大移動に出会ったとき「間に合った」という気持ちをすごく強く持ったんですね。もう1000年も2000年も同じような時間が流れていて今も同じようにカリブーが旅しているということが、本当に不思議な気がしたのです。』

二つの大事な自然についても繰り返し語っています。一つは身近な自然。自分の生活圏に小さな森があるということに安堵感を覚える、。もう一つの自然は遠い自然だと思う。「遠い自然の大切さというのは、自分の想像する自然だと思うんです。そこに行かなくても、まずそういう世界を持っているということ、何となく人間を豊かにする自然。例えばアラスカにオオカミが一頭もいなくなってしまうとしても、僕らの生活は何も変わらないわけですね。でも想像の中で、アラスカからオオカミがいなくなってしまうたら僕たちは大きなものを失うことになる。」

見る機会はないけれど、こういう世界をいつまでも持っていたいですね。

星野さんのことばは、心の琴線に触れて豊かな世界を想像させてくれます。

クマの親子の愛情豊かな世界をとらえた写真も多数残したのに、人間の都合で餌付けされたクマに襲われて亡くなったのは残念でなりません。でもその一瞬まで全力を尽くして走りきったのだから、生前に語ったように潔く完結したのだと思います。



## 「エディット・ピアフ 愛の賛歌」

仏・チェコ・英合作

オリヴィエ・ダアン監督

# 映画

シャンソン歌手、エディット・ピアフの波乱に富んだ47年の短い生涯を描いた作品です。貧しい少女時代を祖母の娼館で育ち、10歳で大道芸人の父と街頭に立ち歌います。「ラ・マルセイエーズ」が胸にしみます。歌の才能をクラブのオーナーに見いだされ歌手としてデビュー。舞台へと駆け上がっていきませんが、それとは裏腹に失意と孤独がついて回りました。ボクシング世界王者とのつかの間の恋。幸せは長くは続かず、飛行機事故で亡くします。その悲しみのなかで作り歌ったのが「愛の賛歌」でした。愛を求めてかなわず、愛に傷つきながらその全ての思いを歌に託した絶唱が素晴らしい。劇中の歌声はピアフのものですが、演じたコティヤールがその人になりきって、歌うことで孤独を慰め、存在理由を確かめた生涯を演じきり圧巻。

ピアフの歌が歌い継がれる訳がわかったような気がしました。幸せな人生だったら、こんなに愛の素晴らしさや、悲しさを表現できたでしょうか？

晩年は薬物中毒や、病気で老醜をさらけ出すのですが、舞台に立つと別人のように全身全霊を込めて歌う姿に、生きる意味を問いかけられたように思いました。病に倒れてもなお歌うピアフの「いいえ、私は何も後悔していない」と絶唱するラストに励まされました。

## 「幸せのレシピ」 米

スコット・ヒックス監督

人気レストランの料理長を務めるケイト（キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ）は妥協を知らない完璧主義者。厨房内の緊迫感が、これからの展開を暗示します。

ある日突然、亡き姉の遺児ゾーイ（アビゲイル・ブレスリン）を引き取ることに。ところがせっかく手をかけた料理も手をつけません。

そんなある日、イタリア仕込みのニック（アーロン・エッカート）が副料理長として雇われ、厨房には陽気な音楽が流れ、空気が一変します。

この二人の存在がケイトの人生を大きく変えていきます。

ゾーイはニックの母親伝授のスパゲティを美味しく食べ、生気を取り戻し、ニックと大の仲良しに。仕事一途だったケイトは二人とふれあう中で柔らかな表情に変わって行きます。3人で食卓を囲み、愛する人と食事することの温かさに気が付くのです。完璧な厨房の外へと一歩踏み出すことになったケイトの新しい世界が広がります。ニックとゾーイと3人で作る幸せのレシピ。私も晴れ晴れとした気持ちになりました。

映像には高級レストランの手の込んだ料理が並びます。誇り高いケイトの完璧な料理ですが、人と楽しく味わって食事することの幸せにはかなわないと思いました。



購読料をありがとう 10月2日～12月15日

細川かつえ（江別市） 東直美（札幌市） 土岐政美（札幌市） 水野隆夫（今帰仁村） 高野ケイ（札幌市）  
菅沼宏之（札幌市） 梅沢俊・節子（札幌市） 恩田小夜子（台東区） 森武昭（狛江市） カンパも含めて  
倉田修（幌延町）5000円 高橋宜也（札幌市）5000円 滝本幸夫（札幌市）5000円 梅沢俊カレン  
ダー 角田慶子（札幌市）切手 小野有五（札幌市）「自然のメッセージを聴く」著書  
（敬称略）合計27000円は印刷、送料に使わせていただきます。郵送をご希望の方は、6号分1000円のお振り込みにもご協力ください。郵便振替 02740-7-56535 です。

印刷のトナーが1本37000円と高く（1回半分）安い印刷屋さんがあればご紹介ください。

## 「サン・ジャックへの道」 仏 コリーヌ・セロー監督

母の遺産相続のためにサンティアゴまで巡礼の旅に出なければならなくなった仲の悪い三兄弟のロードムービー。

経営者で薬づけの兄、教師で夫が失業中の妹、酒びたりに一文なしの弟。そこに字が読めないイスラム教徒の少年、抗がん治療で髪を失った女性、レジャー気分で参加した少女たち、自宅に残してきた息子の病気がきがりなツアーガイドが同行します。

1500km。2ヶ月にわたる旅の途中には豊かな自然との出会いや、厳しい山登りも。

自分のことしか考えていなかった兄弟が一緒に歩いた人たちと人間関係を作り変わっていきます。悩みや不満や不安が歩みを進めるたびに薄れて、心がひとつになって、人間らしい優しさを取り戻していきます。

だからといって教条的な映画ではありません。エスプリもいっぱい。彼らと一緒に旅している気分になり、人生の思いがけないプレゼントに私も思わず笑みがこぼれました。

### 今年一年お世話になりました

写真提供 坂口一弘さん

今年も残り少なくなりました。銀河通信の発行が1ヶ月以上も遅れましたことお許しください。見た映画は2ヶ月以上も前で情報としても古いし止めうかとも思いましたが、資料や記憶をたぐり書きました。生かされた私は、やはり自分らしいやり方で伝えていくことだと思えます。

地球温暖化やイラクの戦争、国内では食の偽装、年金不正薬害肝炎、いろんな事があった2007年でした。



8月のソウベツ川

来年は平和で、平等に命が大事にされる年であって欲しいと思います。今後もお愛読いただきたく嬉しです。皆さまも良い新年をお迎え下さい。新年号はお休みします。(みな子)

## お便り



沖縄 今帰仁村の海 左水野隆夫さん

沖縄では9月29日、集団自決についての文科省の検定撤回を要求して、沖縄県民大会が開かれ、私たち夫婦も今帰仁村から参加して歴史的な現場に立ち会えました。

文科省の白々しい主張には恥ずかしくないのかと腹が立ちます。沖縄県民も怒りの頂点に達しています。辺野古では新たな基地建設を受け入れる人も半分くらいいますが、それはやむなく経済面を考えているので、好きこのんで米軍基地を受け入れている訳ではもちろんありません。しかしこの県民の怒りが基地反対につながって欲しいと強く願っています。

9月30日の朝刊(琉球新報)を同封します。

我が家からオオコウモリやホタルも観察できます。今帰仁村で関西方面の中学、高校の修学旅行生を受け入れ、我が家も10月20日に2回目の受け入れをします。楽しみです。サンゴ礁とカラフルな海水魚を見せてあげたいと考えています。

(今帰仁村 水野隆夫さん)



サンゴ礁のかけら  
(写真 水野隆夫さん)